

贈る笑顔

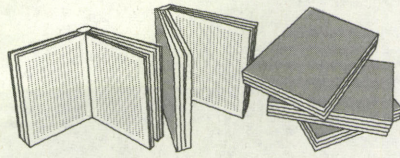
松井とし

「子どもたちを送る日」と題されたこの文章は「育ての心」につづられているほかの文章とはいささか趣の異なる文章である。多くの愛読者を感じさせる、端的で凜とした倉橋の筆致とは異なり、三行目からは保育者の想いを代弁する形式だ。

倉橋はこの保育者に、読者に伝えたい保育の真髓を語らせている。論説とは異なり、臨場感も加わり、読者の共感をよぶのだろう。しかし読めば読むほど奥が深く、表面的にさらっと読み過ごすことはできない一文である。

卒業の日、入園当初の様子からは見違えるように成長し、自立した子どもたち一人ひとりの晴れやかで颯爽とした様子を目で追いながら、保育者が心の中で語りかけている言葉。そこには卒業までの日々を共に生活してきた担任と、子どもたち一人ひとりの強い絆が感じられる。

それにしても保育を体験したことのない倉橋が、子どもたちを送る日の担任の心情、子どもたちとの信頼関係の機微をさりげなく言い表していることに驚く。



「『教育』。そんなことよりも、あなたを迎える朝な朝なが私の楽しみでした」と語る保育者の思いは、子どもたちはどのような顔をして現れるのだろうか、共に過ごす今日という日はどのような一日になるのだろうか、と期待する心もちである。

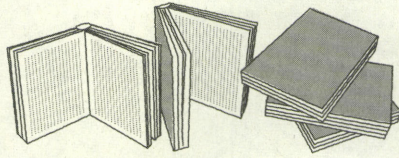
言うまでもなく、あらかじめ枠組みをもつて「教育」をしよう、と構えて迎えるものではない。保育の見通しや計画をもちながらも、子どもたちがその日、意欲をもつて始める遊びを受容し、尊重しながらかわるゆとりある姿勢である。

続けて「『あなたの為』そんなことよりも、あなたといっしょに遊ぶことが私の喜びでした」と語りかけている。子どものためというより、自分にとって共に遊ぶことが喜びであった、というのである。しかし、何も考えずただ楽しく遊んでいればよいということではないだろう。

この三行目、四行目の文章は、遊びの本質と、いまま変わらぬ「保育」という営みの難しさをはらんでいる。

大人になってしまった者にとって、子どもと共に心から楽しみ、遊ぶことは簡単なことではない。共に遊ぶことができるということは、保育者としての専門性の基盤をなす重要な資質である。

子どもが眼を輝かせ、楽しみ、試行錯誤を重ねる遊びは、子どもを温かく見守る保育者の存在、ものや自然の環境によって引き出されるものである。保育者は子どもと



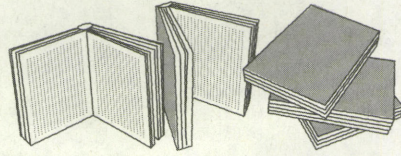
共に活動することを心から楽しみつつ、子どもの自己実現の過程を支える。一方で意識を分化させ、幼児理解を重ねつつ、常に思考しているもう一人の自分があるのである。子どもたちが興味、関心をもっている遊びをさらに充実、発展させていくために、どのようなものがよいか、どのようにかわるか、保育者も試行錯誤をしながら状況をつくっていく。子どもたちの主体的な遊びを中心とする生活全体を通して、その日子どもたちにとって意味のある日となるよう心を砕くのである。

「受け入れ・認める」と「教え・導く」^中二つの役割を行ったり来たりしつつ生きるあり方は、当時間もいまま変わらない保育者の本質的な役割である。

しかし、子どもたちの主体的な遊びを尊重し、保育者の願いとバランスを大切にされる援助はさりげなさを伴うので、外からは見えにくい。それゆえに今日においてさえも、いまだに一般社会では「幼児の主体的な遊び」の本質的な意味が理解されていないのだ。

ところで、保育者が笑顔で子どもたちを送り出すことができる、ということはいったい何を意味しているのだろうか。

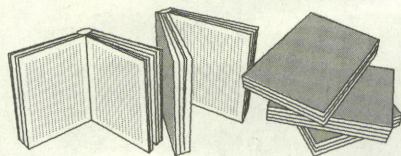
この保育者は行き届かないことが多かったことを認めつつ、「御免なさいなんて、そんなことは決していいませんよ」と言い切っている。なぜなら自分の足りなかったことを子どもは何とも思っていない、と「しつかり、私に分かっているから」と述べ、



だからこそ、にこにこ笑顔で修了を送ることができたのだ、と語っているのである。「笑顔で送る」ことができる保育者と子どもたちとの間には、格別な絆が存在していたのであろう。考えるにそれは子どもたちとの信頼関係を基盤に、互いに心から楽しみ、充実した日々を積み重ねたことにより生まれる協働性である。さらに保育者という役割を超え、子どもたちとの間に相互作用を生み出す、自由感あふれる対等な仲間関係ではないかと考えられる。共に生き、共にはぐくむ関係である。

担任になって間もないころの多くの保育者は、子どもたちを送る「晴れの日」を別の日と感じてしまう。そしていろいろなエピソードを思い出し、成長したわが子を見るように感動し、こみあげる想いに涙するものだ。つたない保育体験だが振り返ると、私はある時期から子どもたちが主体的に始めた遊びが次々と連鎖的に新たな遊びを生み出し、思いがけない充実感が導き出される喜びを味わうことができるようになった。子どもたちが自分の予想や計画、既成概念を超えた時、保育者とか子どもとといった区別なく、心から共感し合える関係が生まれる。子どもたちと日々を創る生きがいを感じられるようになった時期、それは、幼稚園を巣立つ子どもたちを笑顔で送り出せるようになった時期と重なっている。

現行の「幼稚園教育要領」では、子どもたちが協同する経験を重ねることを重視している。人間関係の取り扱いにおいて「幼児が互いにかかわりを深め、協同し



て遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」と、協同する遊びの重要性について述べている。

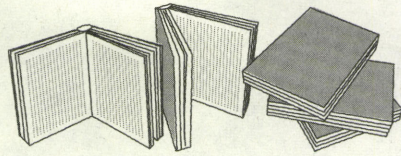
協同する遊びが充実するために、保育者にはさまざまな役割が求められる。集団の中のコミュニケーションを通じて共通の目的がうまれる過程、子どもたちのいろいろなアイデアをつなげ、共通の目的を明確にしていく過程、試行錯誤やトラブルなどの葛藤体験を乗り越えていくそれぞれの過程を受け止め、支えることが重要である。

子どもたちと共に活動しつつ、その役割を自分の喜びとして果たす保育者、その人はきつと子どもたちの卒業をにこにこ笑顔で送る人なのであろう。

この文章を読んでいるとなぜだろうか、故菊池ふじの先生のまるやかでかわいらしく、少し高いお声がよみがえってくる。

菊池は倉橋が理想とした保育者の一人だと言われており、小柄で穏やかな物腰で、いつも笑顔を絶やすことがなかった。私が実習生だった当時は、附属幼稚園園長だった故坂元彦太郎先生に寄り添うように、教頭職を勤めておられた。

子どもたちと共に楽しみ、充実した日々を過ごした実践と言えば、菊池の誘導保育「人形の家」が思い起こされる。子どもたちとの日々を振り返り、菊池が記した文章からは、夢中になって人形の家づくりに励む、若き日の菊池と子どもたちの様子が目

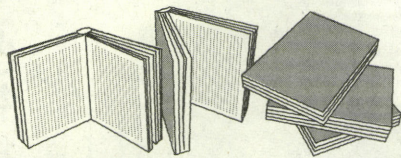


に浮かぶ。^{注3}

ある日、菊池は、さして多くはない材料費の中から二体の人形を買い求め、幼稚園へ持って行く。子どもたちは喜び、代わる代わる人形を抱きかきかいる。菊池は「先生はね、このお人形たちのお家を拵えてあげたいの」と語りかける。「そうだね」と男の子がまず賛成する。家には窓を付けカーテンを下げよう、みんなで床の敷物の縫い取りをしよう、と提案すると「かわいい人形のために」という思いが共通の目標となり、子どもたちは眼を輝かす。

菊池は郷里の自然の中で竹やぶや裏山などにむしろを敷いたり、板を渡して板の間にしたたりして各々自分の家をつくり、互いの家を訪ね合い友達と楽しく遊んだ原体験をもっていた。人形の家であると同時に子どもたちの家としても遊べるように設計するが、柱を直角に切ることが難しく、骨組みが少し曲がりでき上がった家は少し傾いていた、という。

少しずつ体験を重ね、子どもたちは残らずのこぎりやカンナを使いこなすようになった。柱の組み立てが終わると床を張る。板の長さを測ることは菊池がするが、板を切ることを、打ち付けることは子どもたちが行い、代わる代わる釘を打ったり、押さえたりし合ううれしげな顔、見ている菊池までがたまらなくうれしくなった、という。壁を張り、窓を付ける。床板が張られたころから子どもたちは「天井の無いお家は変だ」と天井張りをせがんだ。天井は子どもたちの手が届かないので保育者が張り、次



に家を塗る。何色にしようかと迷っていると、倉橋が「この家は、現実味のないフェアリーに住むようなファンシブルなものにするといい」とアドバイスをする。そこで、外はクリーム色、窓枠は水色となった。塗ることは子どもたちを喜ばせ、「塗りたい、塗らせて」と瞬く間に塗ってしまった。次にきれいな壁紙を貼り、子どもたちの絵を写しとったカーテンを下げ、ズック地に縫い取りをしたカーペットを敷いた。その後子どもたちは関連するさまざまなものづくりに進んで参加し、みんなでつくった家を使って楽しんで遊んだ、という。

最晩年の菊池は当時を振り返り、「ほんとうにあたりまえのことをしただけ」「また生まれ変わって先生になれば同じ様なことをやるだろうと思う」と語っている。

卒業の日、共に楽しみ、よりよく日々を過ごした子どもたちをにこにここと笑顔で送るこの保育者。そつとたたずみ、見守る倉橋の温顔が目には浮かぶようだ。

(淑徳大学専任講師)

引用文献

- 1 鯨岡峻 鯨岡和子著『保育を支える発達心理学』ミネルヴァ書房 二〇〇一年
- 2 『幼稚園教育要領解説』二〇〇八年 文部科学省
- 3 菊池ふじの著『生活に根ざした保育を―誘導保育実践の歩みを振り返る―』

編集協力 永井正子 大泉双葉幼稚園 一九九三年